

い。このような岩石の性質が剥離技術の多様性をもたらした理由の一つとして考えられる。

また、縦長剥片を剥離した石核に類するものとして、同一方向の剥離が連続的に行われるが、作業面が短いものが見られた。その他に、求心状の剥離が表裏の両面で行われ、残核が盤状を呈するもの、不規則な打面転移が繰り返し行われ、不定形な剥片を剥離している石核が出土している。

IV層の遺物は少なく、定形的な石器はスクレイパーや二次加工ある剥片、石核が少量出土したのみであった。フレイク集中ごとにいくつかの接合資料が得られたので、その特徴を記していく。ほぼ原石の段階まで復元できる接合資料が3個体存在する（接合1・7・8）。その内2個体は重さ10kgを越える大型の原石である（接合1・7）。粗い剥離のみで、大型の石核が遺棄されていることから、粗割りによる原石の良否選別が行われていたと考えられる。また復元された個体は、多くの剥片類が接合することなく、部分的な剥離のみが行われている。その中で、接合8は石材の小口面を作業面に設定しており、縦長剥片の剥離が目的であったとみられる。また接合18では、2点の縦長剥片が連続的に剥離されている。これらのことから、A地区のIV層の石器製作では、原石の採取から粗割りの初期段階の工程が行われ、その中に縦長剥片を目的とする剥離技術の存在が認められる。（直江）

3 A地区とB~E地区との関係

先に報告したサンル4線遺跡B~E地区は前述のとおり、A地区の一段上の段丘面に立地する。B~E地区は平底押型文土器が少量出土しており、出土石器に関しても土器に伴う可能性が指摘されている。これはA地区IV層の年代とほぼ同じ年齢的な位置である。また前述のとおり、A地区のII層・V層の遺物に関しても上段の段丘面（B・C地区）に包含されていた遺物であった可能性が高い。これらのことから、A地区とB~E地区は関連性が高く、サンル4線遺跡は平底押型文土器の時期の比較的一括性の高い遺跡であると評価できよう。

しかし、両者の組成内容は大きく異なり、A地区IV層の遺物は珪化岩の初期段階の石器製作に特化した内容であったのに対し、B~E地区では珪化岩製石器のほかに黒曜石製の石鏃、ナイフや石斧などの磨製石器、礫石器などが出土している。珪化岩製の石器には縦長剥片を素材としたつまみ付きナイフが含まれ、石器製作に関しては剥片剥離が進行し、連続的な剥離が行われた段階が主体である。

以上のことからサンル4線遺跡では、B~E地区にベースを置き、河川に近い一段下の台地であるA地区で原石の採取、粗割り、選択を行い、それらをB~E地区に持ち込んで本格的な石器製作を行っていた可能性がある。なお、B~E地区の接合資料を観察すると、縦長剥片の剥離を目的とする作業が主体的に行われている。また、両地区とも掘り込みを伴う遺構や焼土などは確認されておらず、比較的短期間に営まれた珪化岩製石器の製作を主な目的とした遺跡として捉えることができる。

（直江）

4 硅化岩製石器の広がり

（1）下川産珪化岩の特徴

本遺跡は1~3で述べたとおり、縄文時代中期前半の平底押型文土器の時期における珪化岩の原产地遺跡と理解でき、遺跡内では縦長剥片の剥離が目的の一つであったと推測できた。次に本遺跡で集中的に剥離された珪化岩が地理的にどのような分布であったかを見ていく。

サンル4線遺跡から出土した珪化岩は、著しく珪酸化した岩石で、 SiO_2 が95~99%と非常に高く、大部分が石英から構成されている（アースサイエンス株式会社2008）。また、下川産の珪化岩は堆積岩が起源で、凝灰岩にはさまれて続成作用をうけ、珪化したものである可能性が高い（松本2001）。

肉眼的にはやや透明感があり、乳白色、青灰色、赤紫暗灰色、淡褐色、黒褐色と幅広い色調で、それらがまだら模様を呈している例もある。まだら模様の内、白色の部分はめのう質が強い部分となっている。また、脈状の内在割れや植物化石、石英の生じる小さな孔隙が含まれることがあり、剥離面はガサつき、細かな夾雜物が見られることが多い。このような特徴を持つ珪化岩は、他の石材と肉眼での識別が比較的容易である。現状でこのような珪化岩は下川産である可能性が高いが、今後詳細な地質調査を行い、珪化岩の産出地の分布や産状を把握していく必要がある。以上のことから、近隣の地域であれば、肉眼による判別でも下川産の珪化岩とする確証は高いと考えられる。下川産珪化岩の地域外での利用の歴史を見ると、古くは後期旧石器時代に遠軽町白滝遺跡群でも出土しており（北埋文2008）、15kmほど離れた名寄盆地では旧石器時代から縄文時代に一般的に用いられている石材である。また、他の報告書では珪岩、硅岩、チャート、飴石と呼称されることが多い。

(2) 名寄盆地の遺跡

名寄盆地では、日進33遺跡（名寄市教委1988）や日進19遺跡（名寄市教委1992）で平底押型文土器が多く出土しており、散発的な出土も含めると遺跡数はさらに増加する。

日進33遺跡では、つまみ付きナイフ（石匙）が珪化岩に特化した利用であったと報告されており、更にその素材は石刃状の縦長剥片であったとし、同器種の製作に際し「素材の選択があった」としている。

日進19遺跡は全体像が不明であるが、図示された石器を見ると珪化岩製と判断できるつまみ付きナイフが多く、縦型のものが半数以上を占めている。

一方、縄文時代中期後葉の北筒式土器（トコロ6類）が多く出土した、同盆地内の智北6遺跡を見ると（名寄市教委2009）、珪化岩製のつまみ付きナイフは少量となり、更に縦型のものは少ない。全体の石材比率も黒曜石製の遺物が多くなっている。

少数の遺跡のみを観察した結果だが、縄文時代中期の前半と後半を比較すると、前半では縦長剥片を素材とする縦型のつまみ付きナイフが多く見られ、その素材に珪化岩が頻繁に利用されている。中期後葉になると、つまみ付きナイフ自体が減少し、全体の石材比率では黒曜石が増加する傾向が指摘できよう。

(3) 中期前半における周辺の遺跡

次に名寄盆地より遠隔地の縄文時代中期の遺跡を観察する。他の地域では下川産の珪化岩かどうかの断定は避け、黒曜石・珪質頁岩といった一般的に良質で広域に分布する石材か、チャート系の石材かどうかという大まかな観点で概観する。また、名寄盆地での傾向を元にして、つまみ付きナイフを中心とした石材構成を見ていく。なお、石材名称は各報告書での記載をそのまま採用した。

旭川市近辺

旭川市近辺には旭川市忠和2遺跡（旭川市教委1984）の他に、深川市納内3遺跡（北埋文1989）、同市内園6遺跡（深川市教委1996）、芦別市滝里29遺跡（北埋文1999）などで平底押型文土器が多く出土している。

忠和2遺跡のつまみ付きナイフ（つまみ付きスクレイパー）は黒曜石1点、硅岩1点、チャート21点と報告されており、他のスクレイパーと同様にチャートが圧倒的に利用されている。つまみ付きナイフの素材は縦長剥片が主体となっている。また、遺跡内では黒曜石の剥片が多数出土しており、黒曜石の遺跡内加工とチャート製石器の搬入という石材の用い方に対する対照的な姿が浮び上がっている。

る。

納内3遺跡のつまみ付きナイフは、石材の多様性に富み、図示された資料74点中チャートが最も多く23点で、その他は黒曜石18点、めのう16点、頁岩14点、片岩2点、流紋岩1点となっている。縦長剥片を素材としているものが主体と占めている。

内園6遺跡のつまみ付きナイフは、図示された資料20点中珪岩が19点出土し、その他に黒曜石が1点出土している。形態は縦型で、縦長剥片を素材としているものが大半を占めている。また、珪岩・頁岩の剥片が少ないことが指摘され、珪岩製石器が完成品の状態で搬入されていたことを示唆している。

滝里29遺跡のつまみ付きナイフは、ほぼ頁岩で占められ8点出土している。その他は石材不明1点、黒曜石1点（図示なし）となっている。頁岩は、やや透明感のあるまだら模様で、剥離面がガサつくのが特徴である。特に図14-17-7には、剥離面の一部に小さな孔隙が見られ、下川産の珪化岩に近い特徴を持っている。このことから、滝里29遺跡の頁岩は、本稿で言うチャート系の石材に含めて扱うこととする。

道東部

興味深いことに、下川から黒曜石原産地である白滝を越えたオホーツク海側でも同様のことが指摘できる。常呂町（現北見市）常呂川河口遺跡（常呂町教委2000）では平底押型文土器が二つの文化層から出土している。下層のXII層では、図示されたつまみ付きナイフの大半は頁岩で占められている。しかし一部には、やや透明感のあるまだら模様で、剥離面がガサつく特徴を持つ珪化岩に類似したチャート系の石材が含まれている（第251図9・10・11・18・19など）。上層のVIII層でも比較的多くのつまみ付きナイフが出土している。頁岩が半数以上を占めるものの、XII層に比べ黒曜石の比率が上っている。VIII層にも前述の特徴を持つチャート系の石材が含まれている（第184図24・27・29・30、第185図3・6・16など）。なお、更に上層のVII層中（トコロ5類主体）になると前述のチャート系のつまみ付きナイフ（第101図21・22・23）は少数となり、黒曜石製が主体を占めるようになる。

以上のことから、名寄盆地と同様に、平底押型文土器が多く出土する遺跡では、チャート系のつまみ付きナイフが多く利用されている傾向が指摘できよう。

道央・十勝

平底押型文土器が多く出土する地域と隣接した地域はどうであろうか。帯広市宮本遺跡第1地点（帯広市教委1986）や江別市萩ヶ岡遺跡IV2文化層（江別市教委1982）を取り上げる。前者は宮本式土器、後者は萩ヶ岡1式土器が多く出土する遺跡で、押型文土器の出土は散発的である。

宮本遺跡第1地点では、つまみ付きナイフを含め全体に黒曜石の利用が大半を占める。しかし、つまみ付きナイフ中にチャート製のものが3点出土している。

萩ヶ岡遺跡IV層では、つまみ付きナイフの大半は頁岩製と報告されている。それらに混じって一部にやや透明感のあるまだら模様で、剥離面がガサつく特徴を持つ珪化岩に類似したチャート系の石材が含まれている（図102-21・23・25・27・28など）。

これらの隣接した地域では、つまみ付きナイフにチャート系の石材が利用されるものの、主体となるほどの量は出土していない。これは、同地域の押型文土器の出土状況と類似している。なお、この状況は萩ヶ岡遺跡のI～III層でも大きく変化しない。多くの中期後葉の土器と伴にチャート系石材を用いたつまみ付きナイフが少量出土している。

(4) 中期後葉における周辺の遺跡

次に平底押型文土器以降の状況について北筒式土器の例を中心として見ていく。縄文時代中期後葉の北筒式土器（トコロ 6 類）及び中期末葉が多く出土した遺跡として、天塩川水系の音威子府村咲来 2 遺跡（北埋文1992）、旭川市近辺の深川市音江 2 遺跡（北埋文1988）、納内 9 遺跡Ⅱ区（深川市教委 2003）を取り上げる。

咲来 2 遺跡の剥片石器は、石鏃のほかポイント、両面加工のナイフ、スクレイパーが豊富だが、ドリルやつまみ付きナイフが少ない。利用石材も一部に珪質頁岩、珪岩が見られるが、大部分は黒曜石で占められている。

音江 2 遺跡では、図示された石器を見ると石槍又はナイフが21点、スクレイパーが27点（遺構出土 1 点含む）と高い比率で、つまみ付きナイフは 7 点（遺構出土 1 点含む）と少量である。利用石材も一部に珪岩、チャートが見られるが、黒曜石が大部分を占めている。また、遺跡内で黒曜石製石器の加工が行われている。

納内 9 遺跡Ⅱ区の石器類は、153点中石斧が最も多く42点で、以下スクレイパー29点、R フレイク 19点、U フレイク17点、石鏃 7 点、石槍 7 点と続き、つまみ付きナイフは 3 点のみである。剥片石器の石材は黒曜石が主体で、つまみ付きナイフに関しても図示された石器 3 点は全て黒曜石製である。

(5) 平底押型文土器とチャート系石材を用いたつまみ付きナイフの結びつき

以上のように、平底押型文土器を主体とする中期前半の遺跡では、つまみ付きナイフにチャート系の石材が多く利用されており、その中には下川産の珪化岩も含まれている可能性が高い。これらの傾向は、基本的に名寄盆地で確認した状況と同様である。また、検討数は少ないが、その周辺地域にもチャートを用いたつまみ付きナイフが押型文土器と共に散在していたことを確認した。漠然とした結論ではあるが、縄文時代中期前半において下川産の珪化岩を含むチャート系のつまみ付きナイフは、平底押型文土器の広がりと連動して分布していたと考えられる。また、これらの遺跡の一部（内園 6、忠和 2 遺跡）では遺跡への搬入形態として、完成品の持ち込みが指摘されている。したがって、サンル 4 線遺跡で行われた大量の石器製作は、このような脈絡の中に位置付けることが可能であろう。

平底押型文土器文化は、縄文時代前期の相対的に温暖な気候の下に成立した地域性の強い小文化圏を母体として出現したとみられている（熊谷2008）。したがって平底押型文土器文化圏のつまみ付きナイフにおけるチャート系石器の高い利用率は、小文化圏が成熟し、地域内資源の活用を強化したことによるものと考えることもできよう。その一方で、石鏃には黒曜石が多用されている状況から、小文化圏は完全に地域内の資源により成立していたのではなく、隣接地域との交易等も存続していたと判断できる。なお、縄文時代早期・前期・晩期の土器が出土している鷹栖町嵐山 2 遺跡（北埋文1986）では、出土したつまみ付きナイフの形態や加工を検討した結果、大半が縄文時代前期のものと推定されており、その石材構成は黒曜石、珪質頁岩、珪化岩、頁岩など多様である。中期前半の石材構成と類似する要素が前期の段階から見受けられる。

また、縄文時代中期後葉になると、名寄・旭川市近辺・常呂など押型文土器文化圏の中心では、上述の珪化岩などのチャート系石材を用いたつまみ付きナイフが減少し、代わって黒曜石製の石槍・ナイフが増加するようである。その一方で道央部の萩ヶ岡遺跡 I ~ III 層では、少量ではあるが、引き続きチャート系石材を用いたつまみ付きナイフが出土している点は注意を要する。 （直江）

引用・参考文献

論文・書籍等

- アースサイエンス株式会社 2008 「V章2 サンル4線遺跡出土石器の岩石学的分析」『下川町サンル4線遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
- 大泰司 統 2004 「縄文文化前・中期」『北海道考古学』第40輯
- 尾崎 功 2000 『天塩川アイヌ語地名考－天塩から名寄まで－』
- 大沼忠春 1986 「北海道の押型文土器」『考古学ジャーナル』267 ニュー・サイエンス社
- 小山正忠・竹原秀雄 1967 『新版 標準土色帖 2004年版』 日本色研事業株式会社
- 熊谷仁志 1993 「押型文土器の変遷と縄文文化への位置付け」『吉崎昌一先生還暦記念論集 先史学と関連科学』
- 熊谷仁志 1994 「縄文時代前半期・早期・前期・中期・後期」『北海道考古学』第30輯
- 熊谷仁志 2001 「北海道の縄文土器」『新北海道の古代 1 旧石器・縄文文化』 北海道新聞社
- 熊谷仁志 2008 「縄文前期」『知床の考古』しれとこライブラリー9 斜里町・斜里町教育委員会
- 武田 修 1996 「北海道常呂川河口遺跡出土の平底押型文土器について」『野村崇先生還暦記念論集 北方の考古学』
- 友田哲弘 1994 「道北地方」『北海道考古学』第30輯
- 永田方正 1984 『初版北海道蝦夷語地名解 復刻版』 草風館
- 日本ペドロジー学会 1997 『土壤調査ハンドブック 改訂版』 博友社
- 松本みどり 2001 『中新世石化化石による現生型植物の分化過程の解明』 科学研究費成果報告書
- 山田秀三 1983 『アイヌ語地名の研究2』 草風館
- 山田秀三・松浦武四郎 1988 『アイヌ語地名資料集成・別冊東西蝦夷山川地理取調図』 草風館
- 藁科哲男・東村武信 1989 「日進33遺跡出土の黒曜石遺物の石材产地分析」『名寄市郷土資料報告』第4集

団体・組織刊行物

- 下川町史編さん委員会 1968 『下川町史』
- 下川町ふるさと交流館 2006 『下川町史年表』
- 名寄市史編さん委員会 1999 『新名寄市史 第1巻』 名寄市
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター 1997 『美々・美沢』

埋蔵文化財発掘調査報告書

- 旭川市教育委員会 1984 『忠和2遺跡』 北海道旭川市埋蔵文化財発掘調査報告 第4輯
- 恵庭市教育委員会 1992 『中島松1遺跡・南島松4遺跡・南島松3遺跡・南島松2遺跡』
- 江別市教育委員会 1982 『萩ヶ丘遺跡』 江別市文化財調査報告書X V
- 帯広市教育委員会 1986 『帯広・宮本遺跡』 帯広市埋蔵文化財調査報告第3冊
- 札幌市教育委員会 1974 「T77遺跡」 札幌市文化財調査報告書III
- 札幌市教育委員会 1975 「N309遺跡」 札幌市文化財調査報告書X II
- 下川町教育委員会 1964 『モサンル遺跡山口地点』
- 下川町郷土史研究会 1981 『モサンル』

下川町教育委員会	1985	『北町地区の遺跡』 北海道下川町旧石器時代遺跡出土資料2
下川町教育委員会	1986	『桜ヶ丘遺跡』
下川町教育委員会	1995	『桜ヶ丘遺跡Ⅱ』 下川町埋蔵文化財発掘調査報告第1輯
下川町教育委員会	1996	『西町1遺跡』
下川町教育委員会	1997	『西町1遺跡』
下川町教育委員会	1999	『西町1遺跡』 下川町埋蔵文化財発掘調査報告第2輯
下川町教育委員会	2000	『桜ヶ丘遺跡Ⅲ』 下川町埋蔵文化財発掘調査報告第3輯
士別市教育委員会	1961	『多寄』
東京大学文学部	1963	『オホーツク海沿岸知床半島の遺跡』 上巻
東北大学文学部	1982	『モサンル』 考古学資料集4
常呂町教育委員会	2000	『常呂川河口遺跡(2)』
名寄市立図書館	1967	『智東遺跡B地点 図録篇』 郷土資料集第9集
名寄市立図書館	1968	『智東遺跡B地点 本文篇』 郷土資料集第10集
名寄市教育委員会	1988	『名寄市 日進2遺跡・日進31遺跡』 名寄市文化財調査報告書IV
名寄市教育委員会	1988	『名寄市 日進33遺跡』 名寄市文化財調査報告書V
名寄市教育委員会	1991	『名寄市 智北4遺跡』 名寄市文化財調査報告書VI
名寄市教育委員会	1992	『名寄市 日進19遺跡』 名寄市文化財調査報告書VII
名寄市教育委員会	2009	『智北6遺跡』 名寄市文化財調査報告書X
風連町教育委員会	1965	『風連日進の遺跡』 郷土資料集 第1集
深川市教育委員会	1996	『内園6遺跡』
深川市教育委員会	2003	『納内9遺跡』 深川市文化財調査報告17
美深町教育委員会	1999	『ピウカ2遺跡』

財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）

(財)北海道埋蔵文化財センター	1983	『美深町 楠遺跡』 北埋調報15
(財)北海道埋蔵文化財センター	1985	『礼文島幌泊段丘の遺跡群』 北埋調報19
(財)北海道埋蔵文化財センター	1986	『鷹栖町 嵐山2遺跡』 北埋調報40
(財)北海道埋蔵文化財センター	1988	『深川市 音江2遺跡』 北埋調報49
(財)北海道埋蔵文化財センター	1989	『深川市 納内3遺跡』 北埋調報60
(財)北海道埋蔵文化財センター	1990	『余市町 フゴッペ貝塚』 北埋調報72
(財)北海道埋蔵文化財センター	1992	『音威子府村 咲来2遺跡・咲来3遺跡』 北埋調報73
(財)北海道埋蔵文化財センター	1996	『千歳市 ユカンボシC9遺跡』 北埋調報100
(財)北海道埋蔵文化財センター	1997	『恵庭市 ルルマップ15遺跡』 北埋調報118
(財)北海道埋蔵文化財センター	1999	『滝里遺跡群IX』 北埋調報137
(財)北海道埋蔵文化財センター	2001	『白滝遺跡群II』 北埋調報154
(財)北海道埋蔵文化財センター	2004	『千歳市 オルイカ1遺跡(2)』 北埋調報206
(財)北海道埋蔵文化財センター	2007	『下川町 前サンル1遺跡』 北埋調報243
(財)北海道埋蔵文化財センター	2008	『下川町 サンル4線遺跡』 北埋調報258
(財)北海道埋蔵文化財センター	2008	『白滝遺跡群IX』 北埋調報261